

# 魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:松本祥子

所属:北海道平取養護学校

記録日:2019年1月25日

キーワード: コミュニケーション、表現、自己効力感、自己選択、自己決定

## 【対象児の情報】

・学年 高等部3年

・障害名 知的障がいを伴う自閉症

・障害と困難の内容

○「立つ」、「座る」、「おいで」など日常よく聞く言語指示で行動に移すことができる。

○限定された場面ではあるが、絵カードを使って自発的な要求や報告ができる。PECSのフェイズ4程度。

○始めのあいさつなどの決まったフレーズだと、文節ごとに音声を出せる。

○自ら困り感を表出することはないが、予定の変更や、新しい学習の初回に不安定になり正座でジャンプをしたり、近くにいる人をたたいたりする。

## 【活動目的】

・当初のねらい 学校での表現手段を増やす(表現、自己効力感)

→行動で表現する手段以外の方法を身に着けることで、卒業後の生活を豊かに送れるのではないかと考え、朝の会、帰りの会の日直の役割でタブレットを使って取り組んだ。

・修正後の目標 帰りの会の振り返りで3つの写真から一つ選んで発表する(自己選択、自己決定)

→9月の時点で表現手段としてiPadの使用が定着しつつあったので、場面は限定されるが発表場面での表現として取り組んだ。

・実施期間 2018年5月～2019年2月

日直は週に1、2回、帰りの会は毎日実施

・実施者 松本祥子

・実施者と対象児の関係 担任

## 【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

(表出について)

○表出言語はないが言葉らしき音を発するようになってきている。

○「はじめます」、「おわります」の語数に合わせて音を出す。返事やあいさつなどは「あ」と音を出す。

○学校では欲しい物の要求や、報告は絵カードで3語文を構成し、3メートル程度離れた教師に絵カードを手渡して伝えることができる。

○家庭では保護者に具体物を持ってきて欲しい物を伝えている。

○スケジュールに見通しが持てなかったり、自分が予想していたこととは違ったりしたときに正座のままジャンプをしたり、近くにいる人をたたいたりする。

(理解について)

- 名前を呼ばれて挙手する、立つ、座る、おいでなどの日常よく聞く言語指示で行動に移せる。
- スケジュールの準備など、ルーティンになっているものは「～して」などの音声で修正できる。

(道具の操作について)

- 携帯端末であらかじめ時間をセットされたタイマーのアプリを起動し使用できる。
- 鉛筆やシャープペンシルを使って枠からはみ出さずに1cm四方程度の大きさの図形の塗りつぶしができる。

(自己効力感について)

- 朝の会、帰りの会の日直の役割では本生徒が PowerPoint で進行し、表出言語のある生徒が PowerPoint で表示された内容を読み上げていた。
- 作業学習、保健体育の学習ではあらかじめ時間をセットしてある iPhone のタイマーアプリを自分で立ち上げ休憩できる。
- 登校時から険しい表情をしているときには休憩してから朝の会に取り組むため、本生徒一人で行うこともある。

(自己選択について)

- 帰りの会の振り返りでは、複数の学習予定の札から一つを指差して「あ」と言った後に教師が指差した学習予定を読み上げていた。
- 「選ぶ」学習を昨年度から取り組んできたことから2つの選択肢から選ぶことはできていた。

・活動の具体的内容



# DropTalk

- 朝の会、帰りの会をドロップトークを使用して進行した。

進行用で使用していた PowerPoint のイラストと同じイラストと日直のセリフを DropTalk のキャンバスに入力して取り組んだ。



PowerPoint  
(テレビ画面)



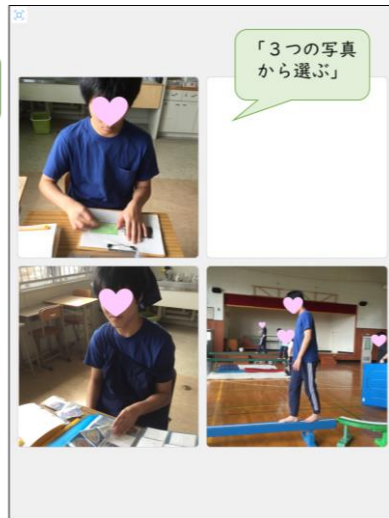
DropTalk  
(iPad 画面)

○帰りの会の振り返りで2つの写真から選択し、ドロップトークを使用して楽しかった学習について表現した。

教師が一日の学習の写真を iPhone や iPad で撮影し、AirDrop で DropTalk の入っている iPad に送り、帰りの会までに DropTalk のキャンバスに貼り付けて取り組んだ。

○2 学期以降、初期には見られなかった、ホームボタンや DropTalk 内のアイコンを押す動作が増えてきたため、全画面表示にしてアクセスガイドをかけた。

○実践開始時には作業場面での取り組みも考えていたが、作業自体に取り組めない日がほとんどだったため、繰り返し毎日取り組んでいる帰りの会に限定した。



### ・対象児の事後の変化

○振り返りでは指差しをして楽しかった学習を伝えていた時は時間割の昼休みのあたりをさすことが多かったが、ドロップトークで2枚の写真から選ぶようにしてからは昼休み以外の学習の写真を選択するようになった。

○iPad の操作は繰り返す中でスムーズになった。

○テレビ画面の画像に合わせてドロップトークを操作して朝の会、帰りの会の進行ができるようになった。

○帰りの会の振り返りでは、ドロップトークを使用して2つの写真から1つ選び発表できるようになった。現在は4つの写真から選んで発表している。

○日直の時にドロップトークの切り替えが難しそうだったので、進行用と発表用の iPad を用意したことで教師の介入が減った。



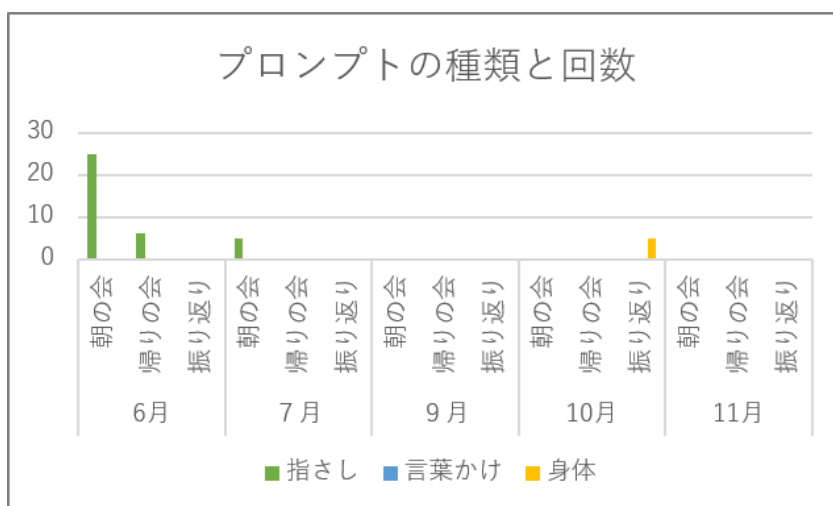
## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

- 「あ」と言って教師の顔を覗き込むことが数回あった。
- 休み時間に iPad を手に取り、お菓子の写真を眺めていた。  
→表現手段が増えたことで代替機能を持つツールとして使用するきっかけになったのではないかと考える。  
(AACとしての役割)
- 特に朝の会、帰りの会ではその場にいるだけでなく、教師の支援なしで活動に参加している。
- 他の生徒が iPad の情報を手掛かりに本生徒に伝えようとしている。  
→教師や友達からの介入が減ったことで「俺もできる！」という気持ちが芽生えているかもしれないと考える。  
(自己肯定感の高まり)

### ・エビデンス(具体的数値など)

- 今まで周囲がしていた通訳の役割を端末が担うようにしたことで「本人の表出」が自発的にできた。
- 朝の会や帰りの会の進行では自ら端末を操作しているので、周りからの介入が減り、会を落ち着いて進められるようになった。



### ・その他エピソード(画像などを含めて)

今年度に入り、障害の困難と内容に記した、近くの人をたたく、正座でジャンプをする行為はほとんどなくなった。伝えたいことがあると教師の手を引いて連れて行く、手持ちの絵カードで何とか教師に伝えようとするなど、知りたいことやしたいことの表現方法が変わってきた。タブレットの操作がスムーズになったり、写真を選択して表現できるようになったりする場面ができたことによって、表現方法(伝え方)で自分の要求がかんうことへの理解が進んだと考える。家庭では引き続き「選ぶ」時の選択肢を3つ以上準備するようにお願いしている。

本生徒は高等部3年生のため、継続した指導はできなくなるが、進路先との引継ぎにおいて、言葉での表出が難しいこと、写真や絵カードなどの手がかりがあると選択できること、場所や人が変わると自発的な要求が難しくなることなどを伝えている。新しい生活でも自分なりの表現で周囲との折り合いをつけて自分の人生を楽しんでほしいと願っている。